

神戸市看護大学の健康づくり活動の 住民の周知・利用状況の実態と大学への期待 — 大学所在地区の全戸住民の 2021 年調査から —

水川真理子¹, 岩本里織¹, 磯濱亜矢子², 勝田玲子¹, 山下正¹, 遠藤真澄¹,
坪井桂子¹, 船越明子¹, 片倉直子¹, 小山富美子^{2,3}

¹ 神戸市看護大学, ² 前神戸市看護大学, ³ 近畿大学

キーワード: 住民調査, 地域貢献, 看護系大学, 健康づくり活動, 周知・利用状況

Awareness and Use of Health Promotion Activities and Community Contribution that Local Residents Expect from Kobe City College of Nursing — From the residents' survey conducted in 2021 —

Mariko MIZUKAWA¹, Saori IWAMOTO¹, Ayako ISOHAMA², Reiko KATSUTA¹,
Tadashi YAMASHITA¹, Masumi ENDO¹, Keiko TSUBOI¹, Akiko FUNAKOSHI¹,
Naoko KATAKURA¹, Fumiko KOYAMA^{2,3}

¹Kobe City College of Nursing, ²Former Kobe City College of Nursing, ³Kindai University

Key Words: Resident survey, Contribution to the community, Nursing colleges,
Health Promotion Activities, Awareness and Usage

要 旨

神戸市看護大学は地域住民との交流や健康増進活動を開学以来継続し実施している。本研究の目的は、大学所在地区の全戸住民対象の生活習慣と健康に関する調査の中で、大学の健康づくり活動についての周知・利用状況、及び大学に期待する健康づくり活動のニーズを明らかにすることとした。

神戸市西区学園西町・東町に住む15歳以上の全住民(推定約15,743人)を対象に、2021年2月～3月に、該当地域住民へ調査票を配布し、調査用紙への回答後に郵送、又はWebフォームへ回答後送信してもらった。属性、健康づくり活動の周知割合と利用割合について記述的統計分析を行い、大学への要望の自由記載内容を質的記述的に分析した。

本調査の回収数は3,876件(有効回答24.5%)、男性1,629人(42.3%)、女性2,214人(57.5%)で、平均年齢は61±17歳であった。

看護大学の健康づくり活動の周知/利用割合は、もの忘れ看護相談(36.6/5.7)%, こころと身体の健康相談(31.7/9.4)%, 体力測定(27.0/32.8)%, 子育て相談(21.9/4.5)%, コラボカフェ(14.3/27.3)%, プレバパ・プレママセミナー(6.9/17.9)%, 教育ボランティア(5.4/25.5)%であった。

健康づくり活動の内容に関する要望は、【身体・健康関連講座や相談会の開催】、【測定や検査の実施】、【スポーツ・ゲーム等の催しの開催】、【COVID-19拡大予防活動】、【食事・栄養関連講座や相談会の開催】、【心の健康の維持・向上のための活動や相談会の開催】、【高齢者の健康維持・向上支援】、【子どもの悩み相談・子育て支援】、【女性の健康関連講座や相談会の開催】、【障がいと生きる人々との共生啓発や相談支援】が挙げられた。

神戸市看護大学の健康づくり活動は高齢者の周知・利用割合が高かったが、周知割合が一定数に留まっているため、働く世代も参加しやすい開催方法にして広報を行う必要がある。住民は看護系大学に医療看護介護に関する講習会や相談会、学生との交流活動等を期待している。さらに、教育・研究活動の中で、教員・学生と住民が協働して健康課題に取り組み、その成果を明らかにすることが求められている。

Abstract

Kobe City College of Nursing has been conducting health promotion activities and exchanges with local residents. The purpose of this study was to clarify the status of awareness and use of the university's health promotion activities and the needs for health promotion activities expected of the university through a survey.

All residents of Gakuen Nishimachi and Higashimachi, Nishi-ku, Kobe City, aged 15 years or older (estimated 15,743 people), were distributed a survey from February to March 2021, and asked to fill out the survey form and send it by mail or fill out a web form. Descriptive statistical analysis was conducted on the attributes, the percentage of awareness and utilization of health promotion activities, and qualitative descriptive analysis was conducted on the freely stated requests to the college.

The survey collected 3,876 responses (24.5% valid responses), with 1,629 (42.3%) males and 2,214 (57.5%) females, and the mean age was 61 years, with 58% of the respondents aged 60 years or older.

The percentages of awareness/utilization of health promotion activities were as follows: forgetful nursing consultation (36.6/5.7)%, mental and physical health consultation (31.7/9.4)%, physical fitness test (27.0/32.8)%, parenting consultation (21.9/4.5)%, collaboration cafe (14.3/27.3)%, pre-parenting and pre-mothering seminar (6.9/17.9)%, educational volunteer (5.4/25.5)%.

The requests regarding the content of health promotion activities were [holding lectures and consultations related to physical health], [conducting measurements and examinations], [holding events such as sports and games], [activities to prevent the spread of COVID-19], [holding lectures and consultations related to diet and nutrition], [holding activities and consultations for the maintenance and improvement of mental health], [support for maintaining and improving the health of the elderly], [consultation on children's problems and support for child rearing], [holding lectures and consultation sessions related to women's health], and [awareness raising and consultation support for coexistence with people living with disabilities].

While the percentage of elderly people who were aware of and used the health promotion activities was high, only a certain number of other generations were aware of the activities. Hence, it is necessary to devise ways to publicize and hold events that are easy for the working generation to participate in. Residents expect nursing colleges to hold seminars and consultations related to medical and nursing care, and exchange activities with students. In addition, they expect faculty members and students to work together with residents on health issues in education and research activities, and to reveal the results of their efforts.

I. はじめに

神戸市看護大学は、2006年に文部科学省現代教育ニーズ取り組み支援プログラム（現代GP）の助成事業「地元住民と共に学び共に創る健康生活」に採択された後、2013年に文部科学省の拠点事業である地（知）の拠点整備事（COC）が採択された。これらの組織的活動の拠点として、2009年に「健康支援地域連携センター」を開設し、2012年には国際的な交流活動も含めた「地域連携・国際交流センター」へ、2014年には「地域連携教育・研究センター」、2021年には「いちかんダイバーシティ看護開発センター」へと名称を変更し、地域住民との交流や健康増進活動等の教育・研究・地域貢献活動を通して健康づくり活動を継続して行ってきた（神戸市看護大学、2023）。

住民向けの健康づくり活動として継続して行っている取り組みには、まちの保健室や、コラボカフェ（神戸市子育て支援事業）、プレパパ・プレママセミナー、教育ボランティア導入授業などがある。このような地域貢献としての健康づくり活動を長期に亘り実施してきた経過において、各健康づくり活動の利用者アンケート調査により、利用者に対しては、参加動機や満足度などを調査した活動評価（池田他、2012；三浦他、2012）や、活動のあり方の検討（坪井他、2013；玉田、2014）に関する報告がなされてきた。一方で、地域住民にはこれらの活動に対する周知状況や利用状況などの調査はされていなかった。そこで、我々は、神戸市看護大学の健康づくり活動に対する地域住民の認識を明らかにしたいと考え、2021年に神戸市西区学園都市地区住民を対象とした生活習慣と健康に関する調査を実施し、その中で大学の健康づくり活動に関する周知・利用状況と大学への要望についても調査を行った。

本研究の目的は、神戸市看護大学の健康づくり活動についての周知状況と利用状況、及び大学に期待する健康づくり活動について明らかにすることである。その上で、今後の看護系大学の地域貢献への示唆を得ることとした。

II. 神戸市看護大学の健康づくり活動について

1. まちの保健室

「まちの保健室」（以下、「まち保」とする）は、兵庫県看護協会神戸西部支部の活動として、2005年から地域住民を対象に実施している。子育て、生活習慣病やこ

ころの健康等様々な健康上の課題に、協力分野の看護教員が相談に応じることで、住民の健康維持・増進を目指すことを目的としている。現在は、こころの悩みを抱えている方を対象とした『こころと身体の看護相談』、もの忘れや認知症に関する不安や困りごとへの支援を行う『もの忘れ看護相談』、子育て中の保護者とその子どもを対象とした『子育て支援』、地域住民一般の方々を対象にした講演や生活体力測定を行う『健康支援』の4拠点で活動している。

2. コラボカフェ

大学施設を活用した神戸市地域子育て支援拠点事業の「ひろば型」として、2012年にコラボカフェが開設され、週3回開催している。生後2か月かつ、首がしっかりすわってから3歳児までの未就園児と、その保護者を対象に、学生と住民の参加を通じた交流の場として親子が健康に育つための子育てを支援することなどを目的としている。

3. プレパパ・プレママセミナー

大学院助産学実践コースの助産診断技術学Iの授業の一環として実施している。セミナーの目的は、神戸市の妊婦とそのパートナーの妊娠期から子育て期を見越したセルフケア獲得への意識を高めることである。一方、セミナーを開催する大学院生は、集団指導の実践的技術を習得することを目標としている。

4. 教育ボランティア導入授業

教育ボランティア導入授業は、2006年度の文部科学省の現代GPに採択された「地域住民とともに学び創る健康生活」の一環である「住民による教育支援」を継続して実施している。地域住民からボランティアを募り、学生と共に授業に参加することで学生との交流を深めると共に、健康教育を受けて自身の健康づくりに活かすことや、社会貢献活動を通じて学生の役に立つなどの生きがいにつながることをねらいとしている。2022年度の教育ボランティア登録者数は70人で、教育ボランティア導入授業は計7科目で実施された（神戸市看護大学、2023）。

これらの活動の周知は、大学ホームページでの案内の他、学園都市と西区竹の台地域への回覧、学園都市地域の福祉センターやショッピングセンター等へ掲示をしている。コラボカフェについては、初回利用時に利用登録を行った後Social Networking Serviceで情報を配信している。

Ⅲ. 方法

1. 対象者：神戸市西区学園西町・東町に住む 15 歳以上の全住民（推定約 15,743 人、世帯数約 7,439 世帯）。

2. 調査（データ収集）期間：2021 年 2 月～3 月。

3. 調査方法：まず初めに、全戸配布に際し該当地域の自治会長より承諾を得た後、住民の理解と協力が得られるように、事前周知チラシを自治会で回覧してもらった。次に、該当地域住民へ調査依頼文と調査票をポストインにて個別配布し、調査用紙への回答後に郵送、または Web フォームに回答後送信してもらった。

4. 調査内容

1) 属性：性、年齢、居住地区、家族構成、職業

2) 神戸市看護大学が主催する健康づくり活動の認知と利用の有無：神戸市看護大学の健康づくりに関する活動（表 2）について、知っているものと、利用したことがあるものについて複数回答でたずねた。

3) 健康づくり活動に対する大学への要望：神戸市看護大学に期待する健康づくり活動を自由記載でたずねた。

5. 分析方法

属性、健康づくり活動の周知割合と利用割合について記述的統計分析を行った。周知割合は性・年齢別の周知人数を分子、性・年齢別の回答者数を分母として、利用割合は活動に参加した性・年齢別の人数を分子、性・年齢別の周知人数を分母として算出した。大学への要望の自由記載内容を質的記述的に分析した。類似した内容毎にコード化し、類似したコードを統合してカテゴリー化を行った。カテゴリー名を【】、コード名を〔〕で表記する。

6. 倫理的配慮

地域住民へは、配布した封筒に質問紙調査用紙に加え、調査の目的・方法・意義および調査に要する時間、調査への協力は任意であること、調査は無記名であること、公表の方法など倫理的配慮について記載した調査依頼文を同封し、同意が得られる場合に調査用紙に回答してもらうことを依頼した。本調査は、神戸市看護大学倫理審査会で承認を得て実施した（第 20112-02 号）。

Ⅳ. 結果

本調査の回収数は 3,876 件（回収割合 24.6%）、有効回答は 3,852 件（有効回答割合 24.5%）であった。

1. 回答者の属性

回答者の属性を表 1 に示す。回答者の性別は男性 1,629 名（42.3%）、女性 2,214 名（57.5 %）で、平均年齢は 60.6（± 16.6, 最大 95, 最小 15）歳であった。10 歳階級別の年齢分布では、60 歳以上が 58% を占めており、40

表 1. 対象者の属性

属性	人	(%)
年齢		
15-19歳	69	(1.8)
20-29歳	127	(3.3)
30-39歳	248	(6.4)
40-49歳	497	(12.8)
50-59歳	497	(12.8)
60-69歳	947	(24.6)
70-79歳	944	(24.5)
80歳以上	332	(8.6)
未回答	201	(5.2)
性別		
男性	1629	(42.3)
女性	2214	(57.5)
その他	3	(0.1)
未回答	6	(0.1)
居住地		
学園東町	2204	(57.2)
学園西町	1353	(35.1)
その他	19	(0.5)
未回答	276	(7.2)
家族構成		
1人暮らし	425	(11.0)
配偶者と2人暮らし	1616	(42.0)
子世帯と同居	1323	(34.3)
親世帯と同居	345	(9.0)
子と親世帯と同居	25	(0.6)
その他	96	(2.5)
未回答	22	(0.6)
職業		
会社員・公務員・団体職員	1092	(28.4)
商工・サービスその他自営業	96	(2.5)
パート・アルバイト	513	(13.3)
主婦	893	(23.1)
学生（高校・大学等）	126	(3.3)
無職	989	(25.7)
その他	129	(3.3)
未回答	14	(0.4)

歳代と50歳代が各13%,30歳代が6.4%,20歳代が3.3%,15歳～19歳が1.8%であった。居住地域は学園東町57.2%,学園西町35.1%であった。家族構成は、配偶者と2人暮らしが42.0%で最も多く、次いで子世帯と同居34.3%,1人暮らし11.0%,親世帯と同居9.0%,子と親世帯と同居0.6%であった。職業は、会社員・公務員・団体

職員が28.4%と最も多く、次いで無職25.7%,主婦23.1%,パート・アルバイト13.3%,学生3.3%,商工・サービスその他自営業2.5%であった。

2. 看護大学の健康づくり活動の周知割合と利用割合
分析対象は性別と年齢の両質問に回答した3,646(男

表2. 看護大学の健康づくり活動の周知・利用割合

回答		総数(n=3646)		15-29歳(n=196)		30-39歳(n=248)		40-49歳(n=486)		50-59歳(n=495)		60-69歳(n=947)		70-79歳(n=943)		30歳以上(n=331)		
		区分(n=男1540,女2106)		(n=男67,女129)		(n=男85,女163)		(n=男168,女318)		(n=男190,女305)		(n=男394,女553)		(n=男485,女458)		(n=男151,女180)		
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
周知割合	こころと身体 の健康相談	女	804	38.2%	15	11.6%	36	22.1%	102	32.1%	120	39.3%	257	46.5%	214	46.7%	60	33.3%
		男	352	22.9%	3	4.5%	8	9.4%	23	13.7%	29	15.3%	90	22.8%	159	32.8%	40	26.5%
		計	1156	31.7%	18	9.2%	44	17.7%	125	25.7%	149	30.1%	347	36.6%	373	39.6%	100	30.2%
	もの忘れ看護 相談	女	978	46.4%	8	6.2%	42	25.8%	126	39.6%	155	50.8%	315	57.0%	257	56.1%	75	41.7%
		男	358	23.2%	4	6.0%	6	7.1%	19	11.3%	28	14.7%	91	23.1%	162	33.4%	48	31.8%
		計	1336	36.6%	12	6.1%	48	19.4%	145	29.8%	183	37.0%	406	42.9%	419	44.4%	123	37.2%
	子育て相談	女	584	27.7%	13	10.1%	51	31.3%	106	33.3%	85	27.9%	173	31.3%	126	27.5%	30	16.7%
		男	213	13.8%	1	1.5%	15	17.6%	27	16.1%	14	7.4%	45	11.4%	94	19.4%	17	11.3%
		計	797	21.9%	14	7.1%	66	26.6%	133	27.4%	99	20.0%	218	23.0%	220	23.3%	47	14.2%
	体力測定	女	648	30.8%	9	7.0%	12	7.4%	69	21.7%	84	27.5%	211	38.2%	191	41.7%	72	40.0%
		男	338	21.9%	7	10.4%	12	14.1%	19	11.3%	32	16.8%	85	21.6%	133	27.4%	50	33.1%
		計	986	27.0%	16	8.2%	24	9.7%	88	18.1%	116	23.4%	296	31.3%	314	33.3%	122	36.9%
コラボカフェ	女	389	18.5%	16	12.4%	77	47.2%	107	33.6%	56	18.4%	72	13.0%	50	10.9%	11	6.1%	
	男	131	8.5%	6	9.0%	15	17.6%	23	13.7%	9	4.7%	24	6.1%	46	9.5%	8	5.3%	
	計	520	14.3%	22	11.2%	92	37.1%	130	26.7%	65	13.1%	96	10.1%	96	10.2%	19	5.7%	
プレバパブレ ママセミナー	女	180	8.5%	10	7.8%	28	17.2%	59	18.6%	26	8.5%	38	6.9%	17	3.7%	2	1.1%	
	男	72	4.7%	2	3.0%	13	15.3%	20	11.9%	7	3.7%	13	3.3%	15	3.1%	2	1.3%	
	計	252	6.9%	12	6.1%	41	16.5%	79	16.3%	33	6.7%	51	5.4%	32	3.4%	4	1.2%	
教育ボラン ティア	女	116	5.5%	4	3.1%	6	3.7%	21	6.6%	17	5.6%	30	5.4%	24	5.2%	13	7.2%	
	男	80	5.2%	1	1.5%	9	10.6%	13	7.7%	7	3.7%	13	3.3%	30	6.2%	6	4.0%	
	計	196	5.4%	5	2.6%	15	6.0%	34	7.0%	24	4.8%	43	4.5%	54	5.7%	19	5.7%	
利用割合	こころと身体 の健康相談	男	44	12.5%	1	33.3%	3	37.5%	1	4.3%	2	6.9%	10	11.1%	16	10.1%	11	27.5%
		女	65	8.1%	1	6.7%	2	5.6%	7	6.9%	8	6.7%	13	5.1%	24	11.2%	10	16.7%
		計	109	9.4%	2	11.1%	5	11.4%	8	6.4%	10	6.7%	23	6.6%	40	10.7%	21	21.0%
	もの忘れ看護 相談	男	29	8.1%	0	0.0%	0	0.0%	1	5.3%	4	14.3%	7	7.7%	12	7.4%	5	10.4%
		女	47	4.8%	0	0.0%	1	2.4%	1	0.8%	4	2.6%	12	3.8%	19	7.4%	10	13.3%
		計	76	5.7%	0	0.0%	1	2.1%	2	1.4%	8	4.4%	19	4.7%	31	7.4%	15	12.2%
	子育て相談	女	28	4.8%	2	15.4%	2	3.9%	19	17.9%	3	3.5%	1	0.6%	1	0.8%	0	0.0%
		男	8	3.8%	1	100.0%	3	20.0%	3	11.1%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.1%	0	0.0%
		計	36	4.5%	3	21.4%	5	7.6%	22	16.5%	3	3.0%	1	0.5%	2	0.9%	0	0.0%
	体力測定	男	121	35.8%	3	42.9%	8	66.7%	5	26.3%	7	21.9%	28	32.9%	48	36.1%	22	44.0%
		女	202	31.2%	4	44.4%	4	33.3%	10	14.5%	12	14.3%	57	27.0%	73	38.2%	42	58.3%
		計	323	32.8%	7	43.8%	12	50.0%	15	17.0%	19	16.4%	85	28.7%	121	38.5%	64	52.5%
コラボカフェ	女	119	30.6%	2	12.5%	47	61.0%	51	47.7%	6	10.7%	9	12.5%	2	4.0%	2	18.2%	
	男	23	17.6%	3	50.0%	9	60.0%	8	34.8%	1	11.1%	1	4.2%	0	0.0%	1	12.5%	
	計	142	27.3%	5	22.7%	56	60.9%	59	45.4%	7	10.8%	10	10.4%	2	2.1%	3	18.8%	
プレバパブレ ママセミナー	男	13	18.1%	1	50.0%	3	23.1%	7	35.0%	2	28.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	女	32	17.8%	3	30.0%	11	39.3%	18	30.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	計	45	17.9%	4	33.3%	14	34.1%	25	31.6%	2	6.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
教育ボラン ティア	女	33	28.4%	0	0.0%	2	33.3%	3	14.3%	4	23.5%	7	23.3%	11	45.8%	6	46.2%	
	男	17	21.3%	0	0.0%	2	22.2%	0	0.0%	1	14.3%	1	7.7%	11	36.7%	2	33.3%	
	計	50	25.5%	0	0.0%	4	26.7%	3	8.8%	5	20.8%	8	18.6%	22	40.7%	8	42.1%	

性 1549 人, 女性 2106) 人とした。性・年齢別の活動の周知割合と利用割合を表 2 に示す。

1) 看護大学の健康づくり活動の周知割合

周知割合が高かった活動は順に「もの忘れ看護相談」, 「こころと身体健康相談」, 「体力測定」, 「子育て相談」, 「コラボカフェ」, 「プレパパ・プレママセミナー」, 「教育ボランティア」であった。

最も周知割合が高かったのは「もの忘れ看護相談」の 36.6%(女性 46.4%, 男性 23.2%) であった。周知割合が高い世代は, 女性では 60 歳代 57.0%, 70 歳代 56.1%, 50 歳代 50.8%, 80 歳以上 41.7% で, 男性では 70 歳代の 33.4% と 80 歳以上の 31.8% であった。

次に周知割合が高かったのは「こころと身体健康相談」31.7%(女性 38.2%, 男性 22.9%) であった。周知割合が高い世代は, 女性では 70 歳代 46.7%, 60 歳代 46.5%, 50 歳代 39.3% であった。男性では 70 歳代 32.8%, 80 歳以上 26.5%, 60 歳代 22.8% であった。

「体力測定」の周知割合は 27.0%(女性 30.8%, 男性 21.9%) であった。周知割合が高い世代は, 女性は 70 歳代 41.7%, 80 歳以上 40.0%, 60 歳代 38.2% であった。男性は 80 歳以上 33.1%, 70 歳代 27.4%, 60 歳代 21.6% であった。

「子育て相談」の周知割合は 21.9%(女性 27.7%, 男性 13.8%) であった。周知割合が高い世代は, 女性は 40 歳代 33.3%, 30 歳代と 60 歳代が 31.3% であった。男性は 70 歳代 19.4%, 次いで 30 歳代 17.6%, 40 歳代 16.1% であった。

「コラボカフェ」の周知割合は, 全体で 14.3%(女性 18.5%, 男性 8.5%) であった。周知割合が高い世代は, 女性では 30 歳代 47.2%, 40 歳代 33.6%, 男性では 30 歳代 17.6%, 40 歳代 13.7% であった。

「プレパパ・プレママセミナー」の周知割合は 6.9%(女性 8.5%, 男性 4.7%) であった。周知割合が高い世代は, 女性では 40 歳代 18.6%, 30 歳代 17.2% で, 男性では 30 歳代 15.3%, 40 歳代 11.9% であった。

「教育ボランティア」の周知割合は 5.4%(女性 5.5%, 男性 5.2%) であった。周知割合が高い世代は, 女性では 80 歳以上 7.2%, 40 歳代 6.6%, 50 歳代 5.6% で, 男性では 30 歳代 10.6%, 40 歳代 7.7%, 70 歳代 6.2% であった。

2) 看護大学の健康づくり活動の利用割合

利用割合が高かった活動は順に「体力測定」, 「コラ

ボカフェ」, 「教育ボランティア」, 「プレパパ・プレママセミナー」, 「こころと身体健康相談」, 「もの忘れ看護相談」, 「子育て相談」であった。

最も利用割合が高かったのは「体力測定」で 32.8%(男性 35.8%, 女性 31.2%) であった。周知割合が高い世代は, 男性では 30 歳代 66.7%, 15 ~ 29 歳 42.9%, 80 歳以上 44.0%, 70 歳代 36.1% であった。女性は 80 歳以上が最も高く 58.3%, 15 ~ 29 歳 44.4%, 70 歳代 38.2% であった。

次に利用割合が高かったのは「コラボカフェ」の 27.3%(女性 30.6%, 男性 17.6%) であった。利用割合が高い年代は, 女性は 30 歳代 61.0%, 40 歳代 47.7% で, 男性は 30 歳代 60.0%, 15 ~ 29 歳 50.0%, 40 歳代 34.8% であった。

「教育ボランティア」の利用割合は 25.5%(女性 28.4%, 男性 21.3%) で, 周知割合が高い世代は, 女性では 80 歳以上 46.2%, 70 歳代 45.8% で, 男性では 70 歳代 36.7%, 80 歳以上 33.3% であった。

「プレパパ・プレママセミナー」の利用割合は 17.9%(男性 18.1%, 女性 17.8%) で, 利用割合が高い年代は, 男性は 15 ~ 29 歳 50.0%, 40 歳代 35.0%, 50 歳代 28.6%, 30 歳代 23.1% であった。女性は 30 歳代 39.3%, 40 歳代 30.5%, 15 ~ 29 歳 30.0% であった。

「こころと身体健康相談」の利用割合は 9.4%(男性 12.5%, 女性 8.1%) で, 利用割合が高い年代は, 男性は 30 歳代 37.5%, 15 ~ 29 歳 33.3%, 80 歳以上 27.5% であった。女性は 80 歳以上 16.7%, 70 歳代 11.2% であった。

「もの忘れ看護相談」の利用割合は 5.7%(男性 8.1%, 女性 4.8%) で, 利用割合が高い年代は, 男性は 50 歳代 14.3% と 80 歳以上 10.4% で, 女性は 80 歳以上の 13.3% であった。

「子育て相談」の利用割合は 4.5%(女性 4.8%, 男性 3.8%) で, 利用割合が高かった年代は, 女性は 40 歳代 17.9%, 15 ~ 29 歳 15.4% で, 男性は 15 ~ 29 歳 100.0%, 30 歳代 20.0% であった。

3. 神戸市看護大学に期待する健康づくり活動

神戸市看護大学に期待する健康づくりとしては, 活動内容に関する要望と, 活動の運営方法に対する要望や意見の 2 つに分類された。

1) 健康づくり活動の内容に関する要望

健康づくり活動の内容に関する要望は 34 のコードが抽出され 10 のカテゴリーに分類された (表 3)。全世代向けでは, 【身体・健康関連講座や相談会の開催】が最も多く, 次いで, 【測定や検査の実施】, 【スポーツ・ゲーム等の催しの開催】, 【COVID-19 拡大予防活動】, 【食事・栄養関連講座や相談会の開催】, 【心の健康の維持・向上のための活動や相談会の開催】が挙げられた。世代別では, 【高齢者の健康維持・向上支援】に対する要望が最も多く, 次いで【子どもの悩み相談・子育て支援】が挙げられた。性別では, 【女性の健康関連講座や相談会の開催】の要望があり, そのほかに, 【障がいと生きる人々との共生啓発や相談支援】についても挙げられた。

最も要望が多く書かれていたのは, 【身体・健康関連講座や相談会の開催】で, 5 つのコードから成り, 最も多かったのは「健康関連教室・講座・相談」, 次いで「医学・

看護学・薬剤関連講座」, 「AED, 救急救命・応急処置の講習会」, 「メタボ・肥満対策・禁煙相談」, 「緩和ケア・終末期医療の受け方」であった。

次に要望が多かったのは, 【測定や検査の実施】で「体力測定」, 「骨密度・血管年齢測定」, 「健康診断・人間ドックの開催」の 3 つのコードに分けられた。

【スポーツ・ゲーム等の催しの開催】は, 「全世代参加型運動・スポーツ等の催し」, 「ヨガ・ピラティス・ダンスの催し」, 「山歩き・ハイキング・ウォーキングや歩き方講座」, 「スタンブラリー・ゲームの催し」の 4 つのコードに分類された。

【COVID-19 拡大予防活動】は, 「感染・コロナ対策セミナー」, 「コロナ禍における新しい生活行動・地域貢献」, 「PCR 検査, ワクチン接種」に関する要望が挙げられた。

【食事・栄養関連講座や相談会の開催】は, 「健康にいい食事・メニュー/レシピ・食事相談」, 「栄養指導・高齢者向け栄養講座」, 「ダイエットプログラム・ダイエット講座」

の 3 つのコードに分類された。

【心の健康の維持・向上のための活動や相談会の開催】は, 「心の健康相談・メンタルヘルスケア事業」, 「リフレッシュのための活動・講演会」の 2 つが挙げられた。

【高齢者の健康維持・向上支援】は, 「高齢者向け健康講座・体力作り教室」, 「フレイル予防講座・教室」, 「高齢者の生活支援」, 「認知症予防相談・もの忘れ相談・情報提供」, 「介護相談, 介護教室, 介護セミナー」, 「高齢独居者の孤立・孤独対策」の 6 つが挙げられた。

【子どもの悩み相談・子育て支援】は, 「子育て支援事業開催」, 「学校での授業・児童生徒の悩み相談」, 「子どもの発達・性教育や悩み相談」の 3 つのコードがあった。

【女性の健康関連講座や相談会の開催】は, 「更年期女性セミナー」と「婦人科健康相談」の 2 つのコードがあった。

表 3. 健康づくり活動の内容に関する要望

カテゴリー	数	コード	数
身体・健康関連講座や相談会の開催	66	健康関連教室・講座・相談	52
		医学・看護学・薬剤関連講座	7
		AED, 救急救命・応急処置の講習会	4
		メタボ・肥満対策・禁煙相談	2
		緩和ケア・終末期医療の受け方	1
測定や検査の実施	21	体力測定	11
		骨密度・血管年齢測定	5
		健康診断・人間ドックの開催	5
スポーツ・ゲーム等の催しの開催	17	全世代参加型運動・スポーツ等の催し	5
		ヨガ・ピラティス・ダンスの催し	5
		山歩き・ハイキング・ウォーキングや歩き方講座	5
		スタンブラリー・ゲームの催し	2
COVID-19 拡大予防活動	16	感染・コロナ対策セミナー	6
		コロナ禍における新しい生活行動・地域貢献	6
		PCR 検査, ワクチン接種	4
食事・栄養関連講座や相談会の開催	15	健康にいい食事・メニュー/レシピ・食事相談	9
		栄養指導・高齢者向け栄養講座	3
		ダイエットプログラム・ダイエット講座	3
心の健康の維持・向上のための活動や相談会の開催	15	心の健康相談・メンタルヘルスケア事業	8
		リフレッシュのための活動・講演会	7
高齢者の健康維持・向上支援	54	高齢者向け健康講座・体力作り教室	18
		フレイル予防講座・教室	10
		高齢者の生活支援	8
		認知症予防相談・もの忘れ相談・情報提供	8
		介護相談, 介護教室, 介護セミナー	7
		高齢独居者の孤立・孤独対策	3
子どもの悩み相談・子育て支援	14	子育て支援事業開催 (プレババプレママセミナー, コラボカフェ)	8
		学校での授業・児童生徒の悩み相談	4
		子どもの発達・性教育や悩み相談	2
女性の健康関連講座や相談会の開催	3	更年期女性セミナー	2
		婦人科健康相談	1
障がいと生きる人々との共生啓発や相談支援	7	障がい者 (知的, 発達, 精神) 相談事業	3
		障がい者の生活が豊かになる活動支援	2
		発達障害のある人への接し方・啓発事業	2

【障がいと生きる人々との共生啓発や相談支援】は、[障がい者相談事業]と[障がい者の生活が豊かになる活動支援]、[発達障害のある人への接し方・啓発事業]の3つのコードが挙げられた。

2) 健康づくり活動の運営方法に対する要望・意見

健康づくり活動の運営方法は、広報、開催方法、施設開放に関する意見に分けられた。最も多かったのは広報に対する意見で、「活動していることや活動の内容を知らない」や、「活動や取り組みの情報が伝わっていない現状」、「大学自体を知らない、看護大学が何か知らない」という意見もあった。それに対し、「情報は回覧板を通して知っている」という意見もあったが、現状に対し、「大学の活動をもっとアピールする必要あり」や、「宣伝媒体の有効活用」といった広報活動の強化に対する意見が挙げられた。

その他の健康活動としては、「交流の場となる催しの開催」や、「医療・健康の情報発信・提供提供」の要望があり、開催方法として、「学外での交流事業の開催」「土日の開催」の要望、施設開放については、「グラウンド」、「図書館」、「体育館」などの開放の要望があった。

V. 考察

1. 神戸市看護大学の健康づくり活動の周知と利用状況の特徴

健康づくり活動のうち、もの忘れ看護相談(36.6%)、こころと身体健康相談(31.7%)、体力測定(27.0%)は、高齢者の周知・利用割合が高かった。これらの結果は、本研究の回答者の60歳以上の占める割合が61.0%と高いことが影響している可能性がある。地域の統計地理データ(2022a; 2022b)によると、2020年の学園都市地域の60歳以上の割合は44.3%、老年人口割合は24.4%で、神戸市全体(29.2%)、全国(28.6%)と比較すると低い、15年間で約12%増加している。学園都市は1986年より大学が神戸市より誘致され、住宅地が整備されたニュータウンであり(神戸市, 2023)、学生や若者が多い街であるが、開発時期から約40年経過しており、全国的な傾向と同様に高齢化が進んでいる。

もの忘れ看護相談は、これまでの活動では65歳以上の女性の参加者が多かったが、20216年頃より65歳以上の男性の参加者が増加傾向にある(秋定他, 2020)。背景には、認知症の発症は2025年には約5人に1人となるこ

とが推計されている(内閣府, 2017)ことや、仕事等の引退後に地域で過ごす時間が増え、余生を考えながら生活する中で(秋定他, 2020)65歳以上の認知症への関心が高まっていることが推察された。

体力測定の周知・利用割合も60歳以上の高齢者に多かった。本調査の看護大学への健康づくり活動の内容に関する要望においても体力測定の開催が挙げられており、関心の高さがうかがえた。戸田らは(2018)、高齢者にとっては、体力測定会で指摘された異常項目について、後に受診行為と治療に繋がることがあることや、社会に参加する意欲を高める効果があるとしている。2022年度に実施した体力測定の参加者は「毎年参加しデータを比較して楽しんでおり、いつまでも続けたい」と述べており(神戸市看護大学, 2023)、健康度の測定があることは、まち保の参加動機の上位に位置づけられている(池田他, 2012)。

こころと身体健康相談の2022年度の参加者は60歳代以上が最も多く、女性が8割を占めていた(神戸市看護大学, 2023)。本調査と同様の対象者に同じ時期である2021年に行った調査において、うつ尺度の得点が「要注意」であった者の割合は、女性で2割強、男性で1割強と女性が高い傾向にある(岩本, 2024)ことから、こころと身体健康相談というテーマに女性の方が男性よりも関心があり、参加に結びついていることが推察される。三浦らは(2012)、こころと身体健康相談では20～80歳代の幅広い年齢層から、本人や家族の対人関係の悩み、病気や症状、日常生活、服薬、社会資源の活用、受診についてなど多岐にわたる相談を受けており、その理由として、精神と身体両方の相談を受け入れ、何らかの相談を抱えた時に、医療機関に相談するほど緊急性の高い問題ではないが、悩みの訴えや、問題解決、自身の対処能力を高める場として機能していると述べている。今回の調査で周知・利用割合が高い結果であったのは、三浦らが述べるような、地域住民のニーズに応えることができている可能性があると考えられる。

これらのまち保活動参加者の約8割が満足しており、リピーターも多い(池田ら, 2012)ことから、地域で高齢者が増えている背景と看護大学で提供している健康づくり活動が相談者のニーズと合致しており、地域住民の健康づくりに寄与できているのではないかと考える。

2. 神戸市看護大学の健康づくり活動の課題

健康づくり活動を利用したことがあると回答した者は、子育て世代を対象とした活動以外では、65歳以上の女性の参加が多かった。妊婦やその家族、子育て世代を対象とした活動については、40歳代までの周知・利用割合が高かった。令和元年の第1子の母の出生時平均年齢は30.7歳であり（厚生労働省, 2021）、妊娠期から子育て期及び、子育て経験者の男女の周知・利用割合が高いことがうかがえた。2020年の学園都市地区の年少人口割合は14.8%であり、全国（11.9%）、神戸市（11.5%）、西区（12.1%）と比べても高い。同地域の2021年と2007年の住民調査結果の比較では、女性の就業割合は30歳代で27%、40～50歳代では17%の増加がみられ、逆に主婦の割合が2021年は減少し（岩本, 2024）、共働き世帯が増加している。

健康づくり活動は平日昼間の時間帯の開催が多く、就業者や男性が参加しにくい可能性がある。学園都市地域の2021年の就業割合をみると、男性は50.9%、女性は38.2%で（岩本他, 2024）男性の就業は高く、内閣府（2023）によると男性は60歳代後半でも半数が働いている。健康づくり活動の土日の開催の要望が挙がっており、内容によっては、開催曜日や時間の検討が必要であると考ええる。

就労世代が利用しやすい方法として、インターネットを活用した健康情報の取得や相談、オンライン講座の受講が挙げられる。令和3年版情報通信白書によると、インターネットの利用割合は83.4%（総務省, 2021）で、13歳から50歳代では90%以上、60歳代は82.7%である。神戸市看護大学ではコロナ禍に24時間受付のオンライン健康相談を開始し、40～50歳代が多く利用している（神戸市看護大学, 2023）ことから、就労世代でも活用しやすいこのような相談支援の継続と周知が必要と考ええる。

また、「大学の活動や取り組みの情報が伝わっていない」や、「大学自体を知らない、看護大学が何か知らない」という現状も明らかになった。まち保の参加者が活動を知ったきっかけはチラシ（27～54%）と回答している人が最も多いという報告（池田他, 2012）がある。チラシ回覧による広報が有効と考えられる一方、チラシの回覧版をまわすタイミングは半期に一度と、それぞれのまち保活動で同じ時期であり、回覧板をみる時に内容に関心のあるもののみに注目して活動を認知している可能性が推測された。

杉谷ら（2018）は、地域住民の大学への関心や大学の

状況に対する認知はメディアに取り上げられる内容や身近な範囲にとどまっており、大学からの情報提供が十分でないことを挙げており、「大学の活動をもっとアピールする必要がある」、「宣伝媒体の有効活用」といった意見に対する広報戦略を練る必要性が示唆された。

3. 看護系大学としての神戸市看護大学に求められる地域貢献のあり方

神戸市看護大学に期待する健康づくり活動としては、健康関連講座開催に関する要望が最も多く、その他、「交流の場となる催しの開催」、「健康に関する情報発信・提供提供」、「学外での交流事業の開催」、「施設開放」が挙げられた。地域の行政や教育機関、地域組織団体、企業等に所属する人を対象とした調査において、大学の看護学部「地域貢献活動を期待する」と回答した者は94.8%と高く（渡邊他, 2019）、住民が看護大学に期待する活動として多かったのは、医療や看護についての情報提供、看護・介護の講習会、公開講座、学校連携、災害時の看護、図書館などの大学施設解放、学生との交流、育児相談などであり（長野, 2007; 渡邊他, 2019）、本調査で明らかになった要望と類似した結果であった。

我国の大学は、21世紀以降地域貢献に関する部署の設置割合が高くなっている。それは、少子高齢化等の社会構造の変化によって国や地域が抱える問題に対して大学の知見を活用することが求められ、地域からの大学に対する期待が高まっているからだ（長田, 2015）は述べている。神戸市看護大学の地域住民との関わりである教育ボランティア導入授業の本調査における周知割合は5.4%、利用割合は25.5%であった。教育ボランティアの導入により、教育方法の工夫が促され、学生の多様で実践的な学習が可能となっており（江川他, 2011）、教育上重要である。一方、看護大学のボランティアへの参加動機は、「看護教育への関心」、「看護師養成への貢献」、「自由時間の有効活用」、「自分の健康への関心」、「社会とのつながりや貢献」で、参加メリットは、「看護への理解の深まり」、「日常生活に活用できる知識の獲得」、「学生との交流による活性化」であり（玉田他, 2014）、双方向に利点の大きい教育ボランティアの更なる継続、発展が求められる。

さらに、神戸市看護大学では全国に先駆け地元創成看護学実習をカリキュラムに組み込んでいる（神戸市看護大学, 2024）。日本学術会議（2020）は、看護系大学は、看

護学教育課程に地元創成看護学を取り入れるよう提言している。人口減少と少子高齢化、保健医療福祉分野の複雑で多様な課題は、地元住民とともに解決することが重要となる。地元創成看護学実習では、1, 2年生時に地元の人の健康の維持・増進に関連する健康課題を地元の地域包括ケアシステムを見据えて明らかにし、4年生時に地元の人々と共に健康課題を解決するための支援の方向性を考え実施することを掲げている（神戸市看護大学, 2024）。このような地域住民との学び合いの機会がより広く周知され、住民の参加者を増やして学生との交流の機会を増やすことで、本調査から明らかになった「交流の場となる催しの開催」や「医療・健康の情報発信・情報提供」という要望に応えることになると思う。

大学は学生への教育のみならず、研究結果を地域に還元することが求められている。今回実施した調査にとどまることなく、今後も継続して地域住民の健康に関するニーズ調査を行うとともに、看護系大学の教員と学生とが住民の健康に寄与するためにできることについて情報提供し、住民と協働することで得られる成果についても調査を行い、全国に先駆けたモデルとしてその活動を発信していくことが重要である。

VI. 研究の限界と今後の課題

本調査の回収割合は24.6%と低かったため、全住民の状況を反映できていない。また、本調査回答者の60歳以上の占める割合は61.0%であり、本調査結果が60歳以上の意見に偏っており、対象地域の年齢分布を十分に反映しきれっていない可能性があるため、今後は若年層の看護大学に対する認識や要望を調査する必要がある。

VII. 結論

神戸市看護大学の健康づくり活動のうち、もの忘れ看護相談、こころと身体健康相談、体力測定については概ね高齢者の周知・利用割合が高かった。一方で、周知割合が一定数で留まっている理由としては、大学の取り組みの情報が伝わっていない現状や働く世代の参加しにくさがあるため、メディアの活用を含めた広報戦略や開催方法の工夫が必要である。地域住民が看護系大学に期待するのは、医療・看護・介護についての情報提供や講習会、相談会、

学生との交流会であり、教員と学生が教育・研究活動の中で、住民と協働して健康課題に取り組み、その成果を明らかにすることが求められている。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただいた住民の皆様
に深く感謝申し上げます。

COI 申告

本研究に関して著者すべてに明示すべきCOIはない。

付記

本研究は兵庫県ポストコロナ社会の具体化に向けた補助事業助成金を得て実施した。なお、本論文は「コロナ禍における神戸市西区学園都市地区の生活習慣と健康に関する調査」の一部を論文としてまとめたものであるが、本論文で示している結果については未発表である。

引用文献

- 秋定真有, 坪井桂子 (2020). 看護大学が取り組む「もの忘れ看護相談」における活動報告. 神戸市看護大学紀要, 24, 69-78.
- 地域の統計地理データ (2022a). 兵庫県神戸市西区学園西町の人口・世帯. 検索年月日 2024 年 4 月 20 日. <https://towncheck.jp/areas/281110990/detail>
- 地域の統計地理データ (2022b). 国勢調査 2020 年調査結果. 兵庫県神戸市西区学園東町の人口・世帯. 検索年月日 2024 年 4 月 20 日. <https://towncheck.jp/areas/281111000/detail>
- 江川幸二, グレグ美鈴, 沼本教子, 他 (2011). 看護大学における地域住民ボランティアを導入した授業の評価ー学生の感想・意見からー. 神戸市看護大学紀要, 15, 57-66.
- 池田清子, 安藤悦子, 岩本里織, 他 (2012). 神戸市看護大学“まち保”の活動評価. 神戸市看護大学紀要, 16, 11-20.
- 伊藤順子 (2019). 高齢者のボランティア活動参加動機とボ

- ランティア活動満足感活動から得た利益および生活満足度との関係. 高齢者のケアと行動科学, 24, 42-52.
- 岩本里織, 磯濱亜矢子, 遠藤真澄, 他 (2024) コロナ禍における神戸市西区学園都市地区の生活習慣と健康に関する調査. 1-102.
- 神戸市 (2023). ニュータウンの概要. 検索年月日 2024 年 4 月 20 日.
<https://www.city.kobe.lg.jp/k25836/kuyakusho/nishiku/shokai/introduction/gaiyou/newtown.html>
- 神戸市看護大学 (2023). いちかんダイバーシティ看護開発センター 2022 年度実績報告書. 検索年月日 2024 年 4 月 20 日.
https://www.kobe-ccn.ac.jp/archives/pdf/be_related/report/report2022.pdf
- 神戸市看護大学 (2024). 看護学実習の特徴. 検索年月日 2024 年 4 月 20 日.
<https://www.kobe-ccn.ac.jp/department/training/>
- 厚生労働省 (2021). 令和3年度「出生に関する統計」の概況 人口動態統計特殊報告. 検索年月日 2024 年 4 月 23 日.
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/syussyo07/dl/gaikyou.pdf>
- 三浦藍, 安藤幸子, 中島友美, 他 (2012). 神戸市看護大学“まち保”『こころと身体 of 看護相談』の活動実績とその評価. 神戸市看護大学紀要, 16, 69-76.
- 永野光子, 島田千恵子, 藤尾麻衣子, 他 (2007). A 看護系大学の地域貢献活動に関する研究 地域住民の期待と今後の課題. 医療看護研究, 3(1), 58-63.
- 内閣府 (2017). 平成 29 年度版高齢社会白書高齢化の状況. 検索年月日 2024 年 4 月 20 日.
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/gaiyou/sl_2_3.html
- 内閣府 (2023). 令和 5 年版高齢社会白書. 高齢期の暮らしの動向 就業所得. 検索年月日 2024 年 4 月 20 日.
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/zenbun/pdf/1s2s_01-3.pdf
- 日本学術会議 (2020) 提言「地元創成」の実現に向けた看護学と社会との協働の推進. 検索年月日 2024 年 5 月 1 日. <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t292-8.pdf>
- 長田進 (2015). 地域貢献について大学が果たす役割についての一考察. 慶応義塾大学日吉紀要. 社会科学, 26, 17-28.
- 総務省 (2021). 情報通信白書 (令和 3 年版). 検索年月日 2024 年 3 月 7 日.
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/r03.html>
- 杉谷祐美子, 小島佐恵子, 白川優治 (2018). 地域の大学に対する地域住民の現状認識と役割期待. 大学評価研究, 17, 137-148.
- 玉田雅美, 渋谷幸, 池田清子, 他 (2014). 地域住民ボランティアが参加する看護技術演習の意義—地域住民の思いと効果—. 神戸市看護大学紀要, 17, 29-38.
- 戸田香; 矢澤浩成; 堀文子; 他 (2019). 世代間交流による地域住民の健康増進の取組みと今後の課題. 中部大学生命健康科学研究所紀要, 1 (15), 68-71.
- 坪井桂子, 清水昌美, 小倉弥生, 他 (2013). 住民のニーズと専門家の知見を基盤にしたもの忘れ看護相談プログラムの検討. 神戸市看護大学紀要, 17, 55-64.
- 渡邊美樹, 篠原亮次 (2019). 地域貢献を目指した看護学部の役割. 健康科学大学紀要, 15, 85-92.